

ホップ・ステップ



第150号
2019年4月1日発行



春期講座の様子差し入れも沢山



昨年、韓国青少年訪日団を利用して外国語部で韓国に行き、その印象をエッセイにし、全国2位になり韓国大使館で表彰された湖陵高校2年生（新3年生）の山上さん。エッセイは裏面にあります。



全8回の入試直前ゼミ、たくさんの過去問で鍛えました。

3/2 超過酷だった受験勉強もこの日が最終日でした。最後に、あなたが市内で一番勉強したという自信をもって試験を受けて下さい！



成瀬 和さん、英検3級合格です！



3/5 入試当日、塾での自己採点、ミスの差し入れも！

合格発表の日の、くるとはづきと彩華とさくら。みんな本当によくがんばりました。



日本赤十字北海道看護大学に昨年の富岡さんに続いて合格した成瀬 京さん。合格証書を見せに来てくれました。こんなに沢山のミスも差し入れてくれました。ありがとうございます。

藤女子大の佐藤さんと日本赤十字北海道看護大学の富岡さん、半年ぶりに来てくれました。差し入れも忘れずに！

新元号、新年慶、新学年、新学期
19年度の入試が終わり、湖陵、北陽、高専が定員割れという異様な状態。釧路地域の生徒は楽な道を選択していると思われ、学校の指導もそれに近いと思います。
しかし、自分の志望校、自分の将来は自分自身が決めるべきです。
AI時代というかつて経験したことのないような困難な時代、そして新元号最初の中1、高1、大学1年生の皆さんは特にそのことを意識し、目標を決め、覚悟を決めて勉強してほしいと思います。
今年の高校入試では学力A・B・Cの平均点では志望校は絶対無理と言われた生徒が、12月から2月の3ヶ月で40点以上アップさせ、入試が過去最高点という生徒が5人もいました。当然、全員志望校に合格です。すごいです。やればできるんです！

そして、7人がそのまま塾に来ることを決め、すでに高校の勉強を始めている人もいます。目標もなく、なまめくる高校3年間を過ごす他の生徒たちと、将来圧倒的な差がつくのは目に見えています。
新しい時代の社会や企業が求める人物は英語が話せる人ではないのです。（英語が必要な人はやる）
先日、高専の電気工学科から北電に入社した森君が突然現れ、どうしたのかを聞くと「網走の新会社に入社です。電力の自由化に伴う北海道電力の分社化です。新会社が、自分が、何をやるのか全く分からない時代なのです。何が起るのか分からない時代なのです。
また、今年の北電の採用試験では学力は全く考慮せず、元気のいい、勢いのある電気、情報工学科の学生3人を採用したそうです。そういう時代です！

北陽高校単位制移行へ

釧路市議会は3月5日、一般質問で市教育委員会に市立釧路北陽高校について、08年度から導入している「フイールド制」を廃止し、22年度から英語を中心に、外国語教育の選択科目を充実させた「単位制」に移行する方向性を明らかにした。生徒が多様な進路選択ができる特色ある学校づくりのため、少人数授業や成熟度別指導が可能な単位制への移行の必要性を強調。少人数制の英語科授業の実施や国際理解教育の充実、外国語部への進学に特化した履修コースの設定など、進路に応じたきめ細やかな教育課程とする方針を示した。また、大学との連携で大学教育に触れる機会の創出や、地元企業とのインターンシップを含む人材育成などを挙げた。
同校は22年度に学級数15教員定数39人となるが、

「巷論」英文法の錯覚 — 未来形について

英文法という観念が、拭いにくい固定観念をわれわれに与えている場合がある。日本語は時制が曖昧で不鮮明だと言われる。それに比して英語では、過去、現在、未来の明確な区分があり、それぞれに完了形や進行形まであって、時間は細分化されていると教わった。西洋人の頭の中は日本人とずいぶん違っているのだと驚いた。柔らかい頭に印象づけられた知識は大人になっても根強く生き続けるから、長い間、そうだと思込んでいた。

しかし、ある時からすべて疑い始める習慣を身に付けると、デカルトを気取っているわけではないが、かつて信じていたことの多くが音を立てて崩れ始める。その中の一つに未来形に関する固定観念がある。英語では、動詞の前に「will」をつけると未来形になると教えられた。だから、未来形という独立した時間観念があるのだと思っていた。しかし英語には未来形などない。
「will」の意味は「意志」だから、人間が何かを決意することによって未来が生まれるだけのこと。

「I will go.」の本質は「意志」のつもり、「私は行く」と決意する「意味に他ならない。決意しないかぎり「行く」という未来は生まれない。未来は「意志」によって生まれ、意志が未来をつくる。未来形という個別的時間観念があった訳ではない。ここに英語を育んだ人々の知恵が光る。彼らはただ、決意することによって未来が生まれることを知っていただけなのだ。ふと足元を見ると、日本語もおなじ。日本語にも未来形などない。日本語の場合、「明日は、雨でしょう」の「う」が未来を現わすと思われがちだが、この「う」は推量、未来ではない。「う」の本質は「行く」の「う」、その本質は「意志」。日本語では「行く」、「明日、行く」と現在形で未来を表す。英語も日本語も、言葉を育んだ先人たちは、われわれがイメージする「未来」などという空疎な観念は信じていなかった。未来は現在の意志の中にしかないことを本能的に知っていた。（川村悦郎）
サント・トマス大学大学院元准教授
釧路新聞 3月6日

単位移行に伴い教員を7人加配、現行1人減の46人となる見通しも示された。
岡部義孝教育長は「時代にこたえる学校づくりを早急に見極めることが必要だ。スムーズな導入に向けて努力したい」と述べた。
単位制の導入は学級減に伴う教員数削減に対する対応とは思えない。フイールド制がうまくいっていなかった訳ではないし、何より国立大学への合格者を増やすために導入した江南高校ですらうまく機能しなかった制度だ。それは江南高校の大学進学実績をみれば判ることだ。
また、従来、北陽高校は就職に優れた学校だったが、近年、北陽高校でさえ就職が難しくなっている。従って大学に進学を目指す進学校目指していると思えないが、学力的に無理がある。
外国に興味のない生徒が多い中、英語教育に力を入れるのにも疑問を感じる。進学校3校は必要ない。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	
		ゴールデンウィーク休み（～6日）							休塾							休塾						中学校入学式	高校入学式	高専入学式 休塾	通常授業開始	★新学期準備休み	春期講座	●中3年生道コン	●中1、2年生道コン	春期講座

携帯電話の発信停止
連絡は塾の電話を使用して下さい。

ストップ 過保護・過干渉！

4月の予定

ニュースの壁

北海道釧路湖陵高等学校2年 山上 彩夏

「韓国は反日の人ばかりなんだよ。」「韓国の授業では日本のことを悪いようにしか言わないんだって。」これは、私が韓国について最初に知ったことである。



私は高校で外国語部に所属している。今年の11月に、外務省が行っている「対日理解促進プログラム」JENESYS2018 韓国青少年訪日団」を利用して外国語部で1週間韓国に行った。このプログラムは韓国の高校の生徒と授業を受けたりホームステイをしたり、韓国の伝統・文化について学び日韓の交流を深めるというものだ。

私にとって初めての海外であり、もちろん初めての韓国でもあった。私は韓国で過ごす1週間のことを考えて期待を日に日に募らせていった。出発が近づいてきたとき、ニュースで日韓関係について報道していた。その内容は決して良いものではなかった。そのニュースでは韓国人が日本のことを悪く言っていたり、デモを行ったりという内容であった。その中でも特に目立った言葉は、「反日」だった。そして、私は少し「反日」という言葉が引っかかったまま出かけることになった。

韓国の高校を訪れた時、私は知らずと身構えていたと思う。なぜならあの時の言葉が引っかかっていたからだ。訪れてまず行われたのは、歓迎式。講堂に足を踏み入れると、目の前にはたくさんの生徒と、聞いたことのないほどの歓声だった。私はこの一瞬で心に引っかかっていた何かが消えた。初めて会った外国人、それにまだ一言も話していない、声も聞いていない私をこんなにも歓迎してくれる人がいる。それだけで私は心の底から嬉しかった。その後、学校の廊下を歩いていけば日本語で「こんにちは」と笑顔で挨拶をしてくれた。一度だけではなく何度も。私も慣れない韓国語で「アンニョンハセヨ」と返す。もうその頃には何とも言えない温かさによってあの言葉の存在はかき消されていた。

私は帰国してから改めて考えた。「ニュースの内容は本当に真実を伝えていたのか。」と。正直、私は少しの間しか韓国にいなかったし、関わった人も少ない。だから、はっきりしたことは言えない。でも、一つだけ自信を持って言えることがある。それは、直接目で見て、聞いて、感じないことには何も分からないということだ。人から聞いた情報だけですべてを決めつけてしまうと、その印象だけですべては決まる。もちろん、その情報の中には正しいものもあるだろう。それに、日本をあり良い国だとは思っていない人は少なからずいると思う。でも、それはほんの一部だ。ニュースは本当に悪いところだけを取り上げていると思ってしまった。その時、私は思った。自分自身が見た・聞いた・感じたことを信じるのが一番だと。そして、ニュースの壁を壊せるのは自分自身しかいないと。

全くその通りです。メディアは真実を伝えていません。SNSも信用はできません。自分の目で見て考え、何が正しいのかを判断出来るようになりますよ！



「過干渉育児」の恐ろしい弊害 子育ては根気が一番

【先回りし過ぎ？ これからは「カーリング→見守り」育児 特集】(1)子どもの成長を阻害する一番の要因とは？ 教育心理の専門家とアドラー心理学者に聞く

子どものやることなすことすべてに口出ししたり、手出ししたりしていませんか？ よかれと思ってやっているかもしれませんが、実はそれこそが子どもの成長する機会を奪い、自立して生きていく力を育むことの阻害要因になっているかもしれないのです。

この特集では、子どもに対する過干渉育児を「カーリング育児」と定義し、そこから脱却するための様々なノウハウをご紹介します。第1回は、教育・心理関係の著書が100冊を超える、明治大学文学部の諸富祥彦教授と、ベストセラー『嫌われる勇気』（ダイヤモンド社）の共著者で、アドラー心理学者・哲学者の岸見一郎さんに、「カーリング育児」がもたらす弊害について話を聞きました。

過干渉育児は子どもの主体性を損なう

子どもって、手がかかる生き物——。そんなふうには思っていないですか？ 実際問題、そうかもしれません。自分で朝起きることもできない、ごはんを作って、

自分で食べることもできない。洗顔も歯磨きも着替えも、靴を履くことすら、私がやってあげている…。そんなご家庭もあるのではないのでしょうか。

「親は子どものためと思ってやっているかもしれませんが、結果として子どものやる気や自主性、自立心、能力開発の機会まで奪ってしまっていることに気付いていません。子どもは何もかも親がやってあげなければいけない存在ではないのです」 こう語るのは、明治大学文学部教授で、『ひとりっ子の育て方』（WAVE出版）など教育・心理関係の著書が100冊を超える、諸富祥彦さんです。

「2020年の教育改革などでも、『主体性のある学び』の大切さを訴えています。親がなんでもやってしまう過干渉育児は、まさにその主体性がない子どもを育ててしまっているのです。本来、自己選択することこそが人生のはず。過干渉で育てられた子どもは、大人になっても自分で職場も結婚相手も何も決められない、自分の頭で物事を考えられない人間になってしまう、そんな恐ろしいリスクがあるのです」 それでは、子どもをほったらかしにすればいいのでしょうか？ 諸富教授は「それも間違っている」と続けます。

親が見守ってくれているから、子どもは安心して遊べる

「子どもになんでもかんでも手出し口出しするのはやめてくださいと言うと、なぜか全く子どもに関わらなくなってしまう極端な人もいます。過干渉がダメならば無関心（ネグレクト）になるというのは、大きな勘違いです。

では親はどうすべきなのか。子どもには“一人で遊ぶ力”がもともと備わっているのだから、子どもが遊んでいるのをただ見守ってあげればいいのです。こう言うと、またスマホをいじりながら、全く子どものことを見なくなってしまう人が多いのですが、それではいけません。子どもは一人で遊んでいるように見えても、時々親が自分のことを見守っているか、確認しています。そのとき、親が自分のことを見守ってくれていると感じると、安心して、また自分の遊びの世界に戻っていけるのです」

余計な手出し、口出しをせず、子どもがすることをじっと見守る。言葉にすると簡単ですが、これができている人は実はごく少数ではないでしょうか。忙しい共働きのママ・パパは、少しでも空き時間があれば、あれをしよう、これをしよう、あくせく動いてしまいます。そうではなく、じっと子どもがやっていることを見守って、子どもが失敗しようが何をしようが自由に遊ばせる。「子育ては根気が一番大事」と諸富教授は指摘します。

「欧米人の親は、例えば子どもがパン屋で好きなパンを選ぼうとしているとき、どんなに時間がかかっても子どもの決断をじっと待ちます。ところが日本人の親は待ちきれず、すぐ『これにした方がいいんじゃない？』などと、自分の都合で選ばせたりしてしまいます。これでは子どもの“自分の人生を自分で決めて、自立して生きていく力”は育ちません。誰もが『共働きで忙しいから』『待っている時間がないから』と言い訳しますが、共働きなのは海外の親も同じ。子どもにかかる時間の使い方が、日本と欧米では違うように思います」

本当に勇気が要る「見守り育児」

アドラー心理学を広く認知させるきっかけとなった大ベストセラー『嫌われる勇気』の共著者、岸見一郎さんも、過干渉育児に警鐘を鳴らす一人です。

「子どもがやることを先回りして、手出し口出しするほうが、親としては実は楽なのです。色々注意して、言うことを聞かせたほうが育児をした気になるからです。

あえて手出し口出しせず、見守るという選択をするほうが、勇気が要る行為です。周りから、『あの人は子どもの面倒をちゃんとみない親だ』などと後ろ指をさされるかもしれません。でもそんな声に耳を傾ける必要はないのです。子ども自身が『これをやろう』と決意し、自ら動き出すのを待つ。そして親は子どもに指示してやらせるのではなく、子どもがやろうとしていることを援助する。そうすることによって、子どもは自立し、自分で生きていく力を育むのです」

手出し口出ししないといっても、命に関わるようなケガをしそうなときや、誰かを傷付けてしまふようなときは「ダメ！」と注意しなくてはならないと、諸富教授も岸見さんも声をそろえます。

「見守る」とは、裏を返せば“いつでも出ていけるように用意しておく”ことでもあります。子どもの行動に意識を向けず、スマホばかり見ていたら、子どもが危ない場面に遭遇したときに、ぱっと俊敏に動くことはできないはず（岸見さん）

この特集では、子ども自身がすべきことやぶつかる障害などを親が先回りして片付けたり、排除したりしてしまう育児を、氷上でストーンを滑らせるスポーツになぞらえて「カーリング育児」と定義しました。子どもが自分で対処すべきことに対して、ストーンの前の氷をブラシで掃くように、先回りしていませんか？

日経 DUAL